ベルリン・コーミッシェ・オーパー来日 新演出『魔笛』日本初上陸！

文：中 東生（音楽ジャーナリスト）

読売テレビ開局60年記念 竹中工務店 presents

©Gunnar Geller

創立70周年を祝ったばかりのベルリン・コーミッシェ・オーパーは、古い固定概念にとらわれない上演と、若手が研さんを積んで世界に旅立っていくエネルギーにあふれる劇場として、戦後からその地位を築いてきた。例えば今話題のキリル・ペトレンコも2002年から音楽監督として研さんを積んだ。そのコーミッシェ・オーパーが20年ぶりに来日する。前回の来日は『ホフマン物語』を携えた1998年だったが、ちょうどその年から専属指揮者に就任した阪哲朗氏は偶然にも11月に東京で、コーミッシェ・オーパーのプロダクションである『こうもり』を、「指揮者が阪だったからこそ」の成功に導いたばかりである。日本人として初めてコーミッシェ・オーパーを率いた経験を持つ阪氏に「古巣」について語ってもらった。

「コーミッシェ・オーパーの第一の特徴はドイツ語をしっかり理解できるように歌わせる技術です。全てのオペラを独語訳で演じるのですが、『ファルスタッフ』などのアンサンブルでどんなに早口になっても、言葉が明瞭に聴き取れるのです。また、第二の特徴は歌と芝居が緻密に編み込まれている演出が可能だということです。コーミッシェ・オーパーでは合唱団員が舞台転換を担うのは普通なのですが、今回の『こうもり』も全幕通して同じ舞台セットを用い、合唱団員が大道具を倒したりすることにより、ハプスブルグ家の没落を示唆したので、稽古は大変でした」

『こうもり』の様子などは各局で放映されるそうなので、実際に観るとより理解できるだろう。

そして今回の来日は、「音楽と芝居をシンクロさせた初めての作曲家(阪氏)」モーツァルトの『魔笛』であり、まさにコーミッシェ・オーパーの特徴が生きる演目である。総監督兼首席演出家のバリー・コスキーも「ドイツ人なら誰でも知っている魔笛」をどう表現するか悩んだようだ。コスキー氏といえば、今年のバイロイト音楽祭でユダヤ人として初めて演出を担当した『ニュルンベルグのマイスタージンガー』が注目された。その直後も、「祖父の遺品のレコードを聴いてから、ずっと演出したかった」と想いを込めたチューリッヒ歌劇場の『エフゲニー・オネーギン』など懐古主義な美しい演出が続くが、彼がコーミッシェ・オーパーの総監督に就任した2012年の11月に発表されたこの『魔笛』では、手作業でのアニメーションを用いた非常に斬新な手法を取り入れ、話題になった。イギリスの映像制作グループ「1927」と3年半にわたって試行錯誤した力作で、「子どもの目や心でオペラを追った様子を映像化してみた」のだという。「現代的童話とイギリス流ユーモアと映画の表現主義を混ぜたよう」なこの演出は、モーツァルト最後のオペラである『魔笛』に混在するユーモアや深さ、ばかげた要素と真面目な要素など全てを表現するのに最適な方法を模索した結果だという。ドイツを出て、アメリカやアジアを回った末、13カ国目として日本に上陸するこの『魔笛』は、オペラの新境地を日本でも見せてくれるだろう。

©Paul Barritt

©Paul Barritt

©Paul Barritt

ベルリン・コーミッシェ・オーパー　オペラ『魔笛』特別番組「天才モーツァルト『魔笛』5つの魔法を解明せよ」
読売テレビ：10月21日（土）放送済　広島テレビ：12月30日（土）15：00～
福岡放送：1月4日（木）10：25～　日本テレビ：1月27日（土）朝4：30～
公式HP　http://www.ytv.co.jp/kob-japan2018/index.html

公演情報はP22、23をご覧ください